「食貨篇」に廻わされているので、これまた同篇の刊行が待たれる。右の気づいた諸点も著者の研究が古典部門より生活部門へと推し進められてゆくなかで解明されることを期待するについても、著者の筆健を祈ってやまないのは私のみではなかろう。

私たちが、これらの三書から学びとるものは、歴史学研究の基礎作業として文献考証の厳しさ、研究意欲と学問的精進とであって、こうした面がややもすれば疎んぜられ理に走り勝な近代の若い学徒に、三書はよき指針ともなることを信じて疑わないのである。稿中、著者に対して数々の妄言と非礼とを重ねたことに著者の御寛容をえれば幸いであり、これらの書が藤井貞文・林陸朗その他の諸氏の労苦によるところを附言しておきたい。（A5（A）三八〇頁　五八〇円（B）四一六頁　六八〇円（C）三九八頁　一二〇〇円　吉川弘文館発行）

（山域高等学校教諭）

D. P. Singhal, India and Afghanistan, A Study in Diplomatic Relations 1876–1907, pp. 216. University of Queensland Press, 1963.

勝藤　猛

本書は一八七六年から一九〇七年までのインドとアフガニスタンの外交関係について、主としてイギリス、インド側の史料を用いて研究したものである。著者シンガル氏（インド人であろう）は、表紙カヴァの紹介によれば、一九五六年から六一年までシンガポールのマラヤ大学でアジア史の講師をつとめ、現在はオーストラリア、ブリスベーンのクイーンスランド大学でインドとパキスタンの歴史と文化を講義している人である。本書はフィリップス教授の指導の下に著者がまとめてロンドン大学へ提出した学位請求論文の一部である。

一八七六年とは、リットンがイギリスのインド総督に就任した年であり、一九〇七年とは、ペルシャ、アフガニスタン、チベットに関する協商がイギリスとロシアとの間に調印された年である。この約三十年間は、著者によれば「アフガニスタンの歴史においては最も重要な形成期であり、イギリス領インドの外交史においては最も実り豊かな」時期であったという。アフガニスタンの形成期とは具体的にはこういうことである。即ち一つには、パシュトゥン族という遊牧的な民族の作った国家の常として国境の観念がまるでなかっ

たのが、この時期に四囲の確定した国境線が引かれたことである。第二には、それまで国王らしいものがあっても、それは有力な族長たちの中から選ばれたいわば族長代表であって、その地位は権威なく不安定で、王位継承には内乱がつきものであったが、この時期に国王にふさわしい権力をもった人物が出現し、その継承も平穏に行われて今日に至っていることである。

イギリスがこの時期に得た収穫とは、ロシアとアフガニスタン、アフガニスタンとインドの国境を画定することによって、アフガニスタンを緩衝地帯としてロシアの南下をくいとめるのに成功したことである。その後、ロシアはソ連となり、パキスタンは独立したが、ソ・ア・パ三国の国境は当時のままである。

アフガニスタンをめぐるロシア・イギリス二大帝国の対立は十九世紀前半に始まる。その頃アフガニスタンの首府カーブルでは、パシュトゥン族のサドザイ氏族のシャー・シュジャの勢力が衰えてインドへ亡命し、代ってバーラクザイ氏族のドースト・モハメッドが国王（アミール）となった。しかし国内は不統一をきわめ、両氏族間のみならず、バーラクザイの中でも兄弟が独立対抗するなど、国内には動乱がたえなかった。或ものはロシアの援助を求め、また或ものはイギリスの支持を期待した。ドースト・モハメッドは前者であった。このためアフガニスタンがロシアの勢力下に入ることを恐れたイギリスは、シャー・シュジャを王位に即かせるべく、一九三八年末、大軍をカンダハール経由で進攻させた。イギリス軍は翌年八月カーブルに入り、シャー・シュジャを王位に即かせることに成功した。しかしシャー・シュジャの権威を認めない民衆はイギリス軍に対するゲリラ戦をくりかえし、イギリス大使を暗殺し、軍隊にも甚大な損害を与えた。これが第一次イギリス・アフガン戦争である。

その後四十年近く、イギリスとアフガニスタンとの関係は平穏であった。インド総督ローレンス（一九六三―六九在任）の書簡にイギリスの態度が見られる。「我々の政策はアフガニスタン国内の抗争に干渉せず、どの派にも与しないことである。またその国民や支配者と友好関係を保つことである。」これがいわゆる「巧妙な無為政策」masterly inactivity である。

一方、ロシア帝国はその頃次第に南に勢力を伸ばして、中央アジアの諸汗国を征服しつつあった。一八六八年、ボハラを、七三年にはヒヴァ、七六年にはホーカンドをそれぞれ併合した。タシュケントにはトルキスタン州総督カウフマン将軍が駐在した。イギリスとしてはこのロシアの脅威からインドを守ることが緊急かつ重要な問題となってきた。

一八七四年、ロンドンではディスレリを首班とする保守党内閣が成立した。そして七六年、リスボン駐在公使リットンをインド総督に任命して、カルカッタへ派遣した。この人事について著者シンガル氏はいう。「ディスレリがリットンを起用した理由はよくわからない。新総督は政治よりも文学を得意としていた。その彼の起用は、彼自身にとってもイギリス国民にとっても意外であった。彼は行政の経験もなく、インドについての知識もなかった。彼に求められたことは、インド政策を企画することではなくて、すでに用意されている政策を実行することであった。彼は政府の方針を全面的に支持したばかりか、立案者以上の熱心さでもってそれを実行したのであ

る。」保守党内閣はロシアの南下を防ぐため、アフガニスタンに対する「前進政策」forward policy を採用し、その忠実な実行者としてリットンを起用したのである。

アフガニスタンでは一八六八年、ドースト・モハメッドの子セール・アリが支配権を握った。彼はロシアの圧力によってロシアの使節を受け入れ、イギリスの使節を拒んだ。リットンはそこでアフガニスタンを責めて、一八七九年、再び軍隊を派遣し、第二次イギリス・アフガン戦争となった。セール・アリはカーブルから逃亡して、マザリシャリフで病死した。この戦争についてロンドンでは野党の自由党が「不要・愚劣・浪費・専横」という言葉を並べて激しく攻撃し、また世論にもこの前進政策を非難する声が強かった。七九年、セール・アリの子ヤクーブ・ハーンと、イギリス側のペシャワール副司政官カヴァニアリとが、ガンダマクにおいて休戦条約に署名した。カヴァニアリはついで大使としてカーブルに駐在することになった。同年七月二十四日、彼は表向きには歓迎されてカーブルに入り居をかまえた。異民族・異教徒に対するパシュトゥン人の反感について、彼はいささかも警戒心をもたなかった。九月二日、「万事異常なし」"All well."の電文がカルカッタ宛発せられて、彼からの連絡がとだえた。折しもラマザーン（イスラム教の断食月）で、民衆の宗教感情が昂揚していた。人々は抜き身の刀をふりまわし、反英のスローガンを叫びながらカーブル市内を行進した。この示威運動に不安を感じた大使官邸の衛兵がまず発砲した。群衆は直ちに官邸を襲って火を放ち、大使を殺害した。この危機に際してイギリスはロバーツ将軍が六千の兵を率いてインドを出発し、十月にカーブルに攻め入った。将軍の目にはすべてのアフガン人が殺人犯に見えたのであろう。容疑者を次々に捕えては処刑した。百人近くが絞首刑に処せられたが、そのうちカヴァニアリ殺害に直接関係があったのは十一人だけだったといわれている。この報復措置に対しては、ロンドンの野党やジャーナリズムのみならず、インド総督府やカーブル進入軍の中にすら、非難の声が高まっていった。

一八八〇年はアフガニスタンとインドとの関係に転機となった。アフガニスタンではドースト・モハメットの孫アブドル・ラフマーンがイギリスの支持を得て王位に即いた。イギリス本国では総選挙――その重要な争点の一つが対アフガニスタン問題であった――の結果、保守党が敗れ、自由党のグラドストンが政権を担当した。インド総督もリットンからリポンとなった。アフガニスタンに対しては「不干渉政策」non-intervention policy が「前進政策」にとって代った。かくてアフガニスタンとインドとの間に友好的雰囲気が生まれてくるのであるが、その中で起った一事件を紹介したい――これはインドとアフガニスタンの関係の歴史においてさほど重要な意義をもつものでないので、本書では極めて簡単にしか述べられていないが。

アブドル・ラフマーンはカーブルの支配者となったけれども、カンダハールにはワリー・セール・アリが、ヘラートにはアユーブ・ハーンがそれぞれ独立した政権を立てていた。アユーブはイギリスを駆逐してカーブルを支配しようとして、ヘラートを出てカンダハールに向った。一八八〇年七月二十八日、カンダハール西方のマイワンドにおいてバロウ将軍の率いるイギリス軍一箇旅団と交戦し、約

一千人を戦死させて完勝を得た。この戦争はゲリラ戦でなく平野での対戦であったから、アフガン人は今も民族の誇りの一つとしている。「アフガン人歴史家はいう。「この戦いはヨーロッパ軍隊に対する東洋人の最も有名な勝利である」と。アールノルド・トインビーは一九六〇年、アフガニスタン一周旅行の途中、マイワンドの古戦場に立ち寄った（Arnold J. Toynbee, Between the Oxus and Jumna, 1962. 黒沢英二訳『アジア高原の旅』）。現在のカーブル市で一番広い道路の名をジャーデ・マイワンド（マイワンド大通）といい、その或ロータリーにマイワンドの戦勝を記念する塔が建てられている。

アブドル・ラフマーンはカーブルからカンダハールへ遠征してアニーブを破りペルシャへ敗走せしめた。そしてイギリスと友好関係を保ちつつ、国内の支配権を次第に強化していった。

アフガニスタンの北辺においては、この国の外交権をもつイギリスがロシアと交渉してロ・ア両国の国境が画定された。またインドとアフガニスタンの間では、インド総督府外交部長官モーティマー・デューランドが提案した国境線の協定が、九三年カーブルにおいて両国代表によって調印された。

一九〇七年、イギリスとロシアとの間に協商が結ばれて、アジアにおける両国の角逐に終止符が打たれることになった。著者はいう。「この英露協商はヨーロッパに急速に盛んになっていた同盟や協調という光の中で見なければならない。これにはアジアの新興国日本が大きな役割を果している。日露戦争の講和条約が調印される前に、イギリスは一九〇二年に日本と結んだ同盟を、〇五年に急いで十年間延長した。」

一九二一年にアフガニスタンとイギリスとの間に条約が作られ、アフガニスタンはイギリスから外交権を回復し、名実ともに独立国として国際的に承認されることになった。

本書の扱う時期については、イギリスではすでに多くの書物が出版されている。政治家が大きな視野で見たものもあるし、戦争に従軍した人の手記もある。著者シンガル氏はこれらを二次的史料とし、根本史料として今まで利用されていない文献を駆使している。その既刊のものとしては議会議事録や「タイムズ」誌があり、未刊の文献として、関係首相・インド総督たちの私信、首相・総督間の機密公文書がある（British Museum, Public Records Office, India Records Office, India Office Library, Historical Manuscripts Commission 所蔵）。未刊の文献を利用しているのが本書の最大の価値といえよう。

イギリスの対アフガニスタン政策についてどんな見方がされているであろうか。まず著者はいう。「インド総督が自由党系であろうと保守党系であろうと、辺境政策におけるインド政府の態度はつねに本国政府よりも強硬であった。この相違の一つの重要な要素は、本国には世論の圧力があったが、インドにはそれがなかったことである。」

トインビーはマイワンドでの感想として「イギリス軍の二回目のアフガニスタン侵入は一回目と同様、不法きわまるものであった」ときめつけている。

アフガン人はイギリス人に対する憎しみの感情を今も保っている。

デューランドが決めた国境線、いわゆる「デューランド・ライン」は、パシュートゥン族の住地を二分したものであるとして、アフガニスタン政府はこの国境を承認しておらず、パキスタン領内のパシュトゥン族住地を「パシュトゥニスタン」として独立させ、その帰属は住民の意思に任すべきであると主張している。東京オリンピックの聖火リレーがこの地域を通過することになった場合、アフガニスタンからパキスタンへのリレーは現在の国境ではなくて、「パシュトゥニスタン」とパキスタンとの境界でなされるべきであると、アフガニスタンのオリンピック委員長は国際オリンピック委員会で主張したといわれている。

なおアフガニスタンとソ連との国境線も、ウズベック、タージーク、トルコマーンなどの諸民族の住地を分断しているが、国境紛争はおこっていない。その理由としてはこれらの諸民族がパシュトゥン族ほどの強い民族意識をもたないこと、国境線の大部分がアム川という自然国境であることなどが考えられる。

（京都大学助手）